

Hernandia, Abelmoschus, Heritiera, Barringtonia, Terminalia, Callophyllum, Blastus, Bruguiera gymnorrhiza, Melastoma, Stimpsonia, Sideroxylon, Maba, Cerbera, Ochrosia, Tournefortia, Thysanospermum, Viburnum sandankwa, Wendrandia, Leucas, Bryonopsis, Alsophila glabra, Alsophila formosana. Prosaptia etc.

ウラジロマキ科 (Amentotaxaceae) に就て

小 泉 源 一

ウラジロマキ (Amentotaxaceae) は、工藤、山本兩氏により、一九三一年熱帯農學雜誌第三卷第二號第百十頁に於て發表されし一新科にして、尙詳細は山本氏により植物研究雜誌第八卷二號及び續臺灣植物圖譜第五號に於て發表されてある。

不肖の見解によれば此新科は宜しく一位科 (Taxaceae) の内に包括すべきものにて、次の如く排列したき考なり。

Taxaceae

Subfam. 1. Taxoideae (一位亞科)

1. *Torreya* (カヤ屬)

2. *Taxus* (イチキ屬)

Subfam. 2. Amentotaxoideae (ウラジロマキ亞科)

3. *Amentotaxus* (ウラジロマキ屬)

4? *Austrotaxus*.

兩氏は Amentotaxaceae を獨立さすべき理由に就ては餘り述べられざるが故に、其意見を知る事難きも不肖の見解にては、種子に就ては勿論問題外にして、雄毬花は其形態之をイチキの雄花より遠きものにあらず、唯イチキの雄毬花が單生なれども、ウラジロマキの雄毬花は穂狀花序を成すのみなり、故に花が單生なると花序を成すとで科を異にするものには非ずと愚考す。雌花は氏の前圖と後圖とは余り異なるから何れが眞か、よく分らぬが、氏の *Epimatium* となすものは然らずして不發育の *Arillus* に他ならず。

日本南部に於けるキク屬の分布

田 代 善 太 郎

イハギク (*Chrysanthemum hakusanense* MAKINO) 本州にては白山、日光其他に

あり。九州にては南部山脈中の洞嶽(日向)白岩山(同)仰烏帽子岳(肥後)に産す。かくも東西相隔絶せる山地に之を産するは、地形及地質上の連絡あるによるか。

リウノウギク (*Chrysanthemum Makinoi* MATSUM. et NAKAI) 四國及本州に之を産す。東海側は信濃、相模、武藏より常陸に及び、日本海側は越中、越後に及ぶ。四國及近畿には多し。本州及四國の廣き範圍に亙りて之を産しながら九州に及ばざるは、タニウツギ、コアヂサキ、ウスギヤウラク、カクミノスノキ、フヂバカマの分布と同じ。

イソギク (*Chrysanthemum marginatum* var. *typicum* MAKINO) 相模、伊豆より紀伊に及ぶ沿海地方に之を産す。之と後記のノヂギクとの雜種と認めらるゝシホギクは阿波の南部と土佐の東部とにあり、共に九州にはなし。この事實よりも九州の植物地理相の他のそれと異なるを知るべし。ホソエウリハダカヘデ、トガサハラ、ズイナ、ナニハイバラ及コモノギク、アサマリンドウ、テイシヤウサウ、チャボホトトギス、クワツコサウ類などの分布とは、其生態を異にするも其分布相は相同じく、九州にてはチャボホトトギスの代りにキバナホトトギスあり(屋久島にはチャボホトトギス) テイシヤウサウの代りに大に形態を異にするマルバテイシヤウサウを見ることなどは、九州の特異性を證するに足るものあり。

アブラギク (*Chrysanthemum lavandulaefolium* var. *hortense* MAKINO) リウノウギクとほぼ分布を同ふす。磐城の三春地方にもあり。近畿には白花品にてシロバナアブラギクと稱せられ、間種と認めらるゝものあり。北村理學士の採集せる隱岐の産品には異態をなせるものありといふ。此種は人陸系の植物にて、壹岐には之を産しながら九州には之を見ず。

シマカンギク 又 **ハマカンギク** (*Chrysanthemum indicum* L.) 九州、四國及中國近畿の地方に分布す、對馬にあり、朝鮮にあり、又支那にもあるが如し。就中最多きは肥後、豊後の阿蘇地溝帶山地、之に接續する瀬戸内海沿岸地方並に近畿の地方にして、近畿にては河内に多く、國境山脈を越えては大和に入り、香落溪(伊賀)の奥、曾爾に達するものあり、山城は八瀬や貴船にも入り込む、又紀伊にも諸所に散在す。中國の日本海側は沿海地方にあり、東するに随つて少し、野村登氏によれば丹後を以て北限の産地とすべきが如し。

牧野博士の變種として記載せられたるシロバナハマカンギクは肥後金峰山彙熊本側の産を原標本とせられたるものにして、其裏側金峰山腹の部落を通ずる小道には其變種甚だ多く、黃花の普通品と相混す。余はかつて上妻博之氏と之を採集せり。肥後と反對側、豊後の大分府間にも同品を見る、山本義光氏及加藤嘉一郎氏の採品にも之あり。又淡路の南部にて採集したる高田權平氏の標本中にも之を見る。

サツマノギク (*Chrysanthemum ornatum* HEMSL.) 九州の西海岸側に限りて之を産するものにして、甌島列島と之に對する九州本土の野間半島より串木野に亙りて之を産す。甌島の北に接する天草の下須島(谷山民次氏、野村貞氏採)にも及ぶ。小泉博士は歐洲旅行中和蘭ライデンにて「ジャワ」産の標本を見たりといふ。分布の徑路は明かならざれども、沖繩列島より九州西部にかけて此の如き分布をなすものには、カントラノヲ、マルバサツキ、クロトチウ、アヲモジあり。

ノヂギク (*Chrysanthemum morifolium* var. *genuinum* f. *japonense* MAKINO) キクの原種として知らるゝ植物なれば支那には之を産すべしと思はるゝも、未だ其標本を見ず。沖繩列島より島嶼を連ねて之を産し、葉厚く葉裏には毛多し、屋久島に産するものはウラジロノヂギクとでもいふを適當とすべき形態なり。それより九州南東部(西半にも及ぶ)四國西南部をへて周防、安藝、播磨及攝津に達す、いづれも沿海地方に之を産す。其の最も發達せるは九州東部以北の地域にして、種々の形態をあらはし、葉潤くして厚きあり、狭くして薄きあり、枝の太くして少き、細くして多きあり、其間に種々の段階あることキクの變化に見る所の如し、本種は九州南部に於て東西に分れ又鹿兒島灣内に入るものあり。九州本土を西進するものはそれよりサツマノギクの分布地域を除きて分布し、肥後羣北郡の北部海岸地方に及ぶ(水俣町にて黃花品を見たる記憶あり)筑後の三池地方に一二僅に遺存する所あり、杉野辰雄氏の採集にかかる。果して本種なりや否を確認する能はず他日の踏査をまつて之を判ぜん。

九州東海岸を東進するものは豊豫海峡に到り一部は南下して土佐の足摺岬を廻りて同國の西部に分布し、他は海峡を入りて伊豫北邊並に國東半島に及ぼし、海流の衝にあたる周防の大島其他の諸島嶼竝に之に對する周防の本土には多く、之を離れるに随つて少し。なほ安藝には之につゞく若干の島嶼に之を産し廣島地方にも數ヶ所に之を産せり。更に離れて播磨の東部數ヶ所に多く、攝津の六甲山麓にも其痕跡を残すも、其間に介在する備中備前の島嶼に之を産せざるは奇といふべし。國東半島以北の九州本土には之に接したる地方には之を見ざるも、離れて豊前の耶馬溪地方、青洞門の邊には葉の尖れる型のノヂギクらしきものあり、山崎利秋氏の採集にかかる。ノヂギクなるか、シロバナハマカンギクなるか調査を要すべし。

周防の大島にては黃花品を見たることなきも、皇座山には僅に之あり、祝島産の標本にても之を見る。室積地方より西すれば漸く黃花品を加へ、島田川に近きては殆んど黃花品のみとなる、白花品もなきにはあらず。黃花品は之より西周防の海岸に之を産するものにして長門にも及ぶが如し。該川を境として東にノヂギクあり、西に

シマカンギクありとは久しく聞く處なるが此の事實を指せるものなり。黄花品は廣島文理科大学の下斗米直昌氏が雜種研究の材料となりたる三田尻産のものに同じ。余は室積女子師範學校教諭池田美成氏より虹ヶ濱に其群落の見事なるものあるをき、同氏の案内によりて之を見たり。之を牧野博士に傳へて、同博士の踏査となり、博士は下斗米氏研究の事實を参照して之をノヂギクとシマカンギクとの雜種と認められニジガハマギクなる新稱を與へられたりときく。

本種は土佐の東部にては下斗米氏の研究によりて之とイソギクとの雜種と認めらるゝシホギクとなりて終り、周防其他にてはシマカンギクとの雜種となりて終り、又サツマノギクと相接して侵さざる等より考ふれば、其由來は他のものよりも後期に屬すると斷じて可なるべきか。而してイソギクとノヂギクとの分布の範圍を異にすることは、恰もホソバワダンとアゼタウナとの關係の如く、兩者はいづれも潮流の激しき地方に産するものにて、前者は西北海岸は九州より長門に及ぶも、東海岸側は日向南部に止まり、東より來りて日向中部に止まるアゼタウナと長き砂濱を隔てゝ相接す。

ミコシギク又**ホソバナセイタカギク** (*Chrysanthemum lineare* MATSUM.) 大陸系の植物にして朝鮮には各地に散在す。九州には阿蘇の千町無田に僅に遺殘し、中國にては安藝の賀茂郡鷹巣山地方及備中の吉備郡大和村にて採集せらる。又遠く下總に事産す(植物名鑑)大陸系植物ホクチアザミの九州、中國を経て遠く三河に産する事實と相似たり。

テウセンノギク (*Chrysanthemum sibiricum* FISCH.) 大陸の植物にして朝鮮に多く九州にては薩摩の磯間岳に之を産す。余は大正十二年初夏イハギリサウを採集せんがために該山にのほりたる折、其嫩植物を認め、其後宮内頭盛氏に其採集を依頼して之を得たり。之は別に土井氏にも傳へたるにより、同氏も之を採集して中井博士に檢定を求め、本種の分布を知るに至りしなり。なほ此山にはイハガサ類を産し、串木野にはダンギク、ダルマギクの大陸系植物を産するを見れば、本種の分布亦偶然にはあらざるべし。

以上は余の知る所を概略記述したる譯なるが、豫め用意したるものにあらざれば、調査は甚だ不充分なり。今後なほ其分布に注意して補遺を記すべければ、讀者の知る所を記者に傳へられんことを切望す。